

21 世紀協会

2002 年度 事業完了報告書

フィリピン現地事務所作成
2003 年 3 月 26 日

もくじ

もくじ	2
はじめに	3
§ 1 1 奨学金事業	4
1 - 1 奨学金事業	4
1 - 2 学習指導	5
1 - 3 識字教育事業	5
§ 2 マンニャン族農村開発事業	6
2 - 1 ホリスティック・ファーミング（総合農業）構想	6
2 - 2 衛生環境整備事業	8
§ 3 エコ農業学校コンプレックス構想	9
3 - 1 農場経営	9
3 - 2 各種職業訓練	10
3 - 3 日本人インターンシップ	11
§ 4 マンニャン人間開発センター構想	11

はじめに

かつては「すべての子どもに教育を」を「マンニャンの子どもたち全てに教育を」にすりかえても、もっと限定して「サンタクルスの子どもたち全てに教育を」と書き換えても、依然、大きな夢にすぎず現実感が伴わなかった。しかし今、夢は現実可能な理想に変わろうとしている。

過去 10 年以上にわたって協会が育ててきた奨学生は確実に成長している。落伍した子どもたちも数え切れないが、それでも協会にかかわった子どもたちは皆、なんらかの形で新しい社会を築くために活躍している。また、活躍することを期待されている。協会奨学生として地元ではじめて大学を卒業し、協会職員として山で識字教育にたずさわっている者だけが次代を作るわけではない。落伍して大学やハイスクールを中退した者でさえ、彼らの社会では立派な学歴所有者なのであり、今度は自分の夢を我が子に、弟や妹に託すだろう。失敗も成功同様、よりよい未来を築く柱となって貢献する意義を持っている。

今、学びたい子ども、子どもに教育を与えたいと思う大人の数は確実に増えている。その数を数えることは不可能であるが、風向きが逆風から追い風にかわりつつあるのを肌で感じるものがしばしばある。事実かって不承不承ながら、といった感のあった山間での識字教育は引き合いだらけである。奨学生希望者も年々増えている。10 年後には教室を今の一箇所から五箇所へ、奨学生の数を何人に増やそう、などという数字によるシミュレーションが可能になっただけでも、驚異的变化というべきである。

体力をつける時期にきている。すでに、奨学生 23 名、正スタッフ 4 名、ボランティア 8 名、インターンを含む日本人 3 名の大所帯である。何かことを起こすには十分な人数である。資金を作らなければならない。スタッフへもっともっとエンパワーメントしなければならない。マンニャン人間開発センターを実現するために現地法人化を急がなければならない。理想になった夢をさらに現実可能な射程距離へ導くために、課題山積みの胸突き八丁を上らなければならない。

1 奨学金事業

1 - 1 奨学金事業

2003年3月現在、協会奨学生数は下表のとおり。奨学生の全てはミンドロ島に住む先住民族マンニャンであり、計23名中15名がイラヤ部族、8名がアラガン部族に属する。

()内アラガン族奨学生数

	小学校	ハイスクール	大学及び専門学校	計
男	4(4)	5(3)	2(0)	11(7)
女	2(1)	7(0)	3(0)	12(1)
計	6(5)	12(3)	5(0)	23(8)

上記中、ハイスクール最終学年(4年生)の3名が4月に卒業予定である。加えて、小学校5年生に在学する4名全てが年齢を考慮されて(最高推定25歳)進級試験を受験しており、合格すれば来期はハイスクールに進学予定。

毎年落伍者は後を絶たないが、ハイスクール生を対象にしたスクリーニング、日々の細かい指導、出身地でのコミュニティー作りが効果を上げ、学期途中での退学は年々減少の傾向にある。今期も計7名の退学者を出したが、4名はパクパク村出身の児童であり、年齢が低かったことが主な原因で、学期が始まって1週間で村に帰ってしまった。しかし協会の運営する村の識字教室には引き続き出席しており、来期の再入学が望まれている。また、ハイスクール3年生の女子奨学生一人は、成績にも素行にも問題はなかったが、突如精神異常をきたし、スタッフ一同人事を尽くしたが改善せず退学することとなった(8月)。もともとマラリア、栄養失調などによる身体的弱さに加え、生活スタイルを含む環境の変化やタガログ人による差別、あるいは劣等感が多大なストレスを子どもたちと与えていることは事実であり、心身ともに十分なケアは就学の要であり、今後の課題である。

就学希望者のかず及びその出身地は年々増加し多様化している。ハイスクールに限れば、今期は4村から計15名が選抜試験を受けた(内5名が合格)。サンタクルス郡内でハイスクールに通うマンニャン族の子弟は協会奨学生以外にいない、という現状を考えれば希望者は今後ますます増加することは間違いなく、寮環境、経営面での問題解決が急がれる。

1 - 2 学習指導

学習指導は、日本人インターン生 2 名（紫垣伸也、国金さつき）が中心となって、奨学生の特に苦手な算数（数学）を中心に週末以外のほぼ毎晩行なわれた。サンタクルスの寮で生活する奨学生の全てが、日本から寄付していただいた公文塾のプリントを毎日行なった結果、学習する習慣が身につく、奨学生全体の学力は着実に向上した。中には学年でもトップクラス入りする子どももでてきたほどである。また、担当スタッフ、日本人インターン生を中心に学校側、奨学生の出身村との連絡はますます密となり、落伍寸前の生徒を立ち直らせることもしばしばあった。

1 - 3 識字教育事業

アムナイ川上流マナゴ村の住民一部が移住してできたパクパク村では、識字教室は単に村の学校以上の意義を有している。村ができてほぼ 5 年、協会の識字教室が開講して 3 年目にあたる今期は特に学校が村づくりの中心として大きく貢献した年であった。もともと半遊牧的生活を送り、大きな集落を形成した経験のないマンニャン族の人々にとって新しい村づくり、本格的農業への移行は大変な意識変革が必要である。今期は農地の分配、水田への水管理などをめぐって村が何度も分裂、雲散霧消の危機を経験したが、識字教育担当の Hermie M. Panagsagan、川島が中心になって指導、説得を行なった結果かえって村意識が育ってきた。また、2 月には不法伐採業者が銃で村人を脅迫、恐れた住民のほとんどが村を離れるという村存亡の重大な危機を迎えたが、Hermie M. Panagsagan が郡行政当局と連携して事件を解決に導いた。このように、学校は単に教育の場のみならず、村づくりのシンボル、一種のセーフティー・ネットとして機能したのである。事実学校の存在、教室の開講は「村の存在」をタガログ人にもアピールする重要な役割を持っている。学校の存在は定住の証明であり、土地を失いつつあるマンニャン族にとってセキュリティを与えることにもなる。パクパク村では現在 10 名から 20 名の児童が学習しているが、村づくりが進むにつれて住民の数は増える見込みであり、学校を中心にした村づくりのモデルとなろう。

最近では、隣村のカマンブガン、マエバなどからも頻繁に教師の派遣、識字教室の開講依頼がきている。今期は 4、5 月、識字教育事業の拡大の先駆けとして、協会のもう一つのパイロット地区であるカンルアン村で試験的に開講した。結果は予想以上に好評で、村の住民のみならず周囲の村からも参加する児童があるほどで、多いときは 30 名を数えた。

1995 年度に細々とシブヨ村で始めたマンニャン村での識字教育事業も、ようやく大きく発展、展開する気配であるが、一方当初より資金源であった郵政次長長のボランティア貯金からの支援金は大幅にカットされることとなった。村で教鞭を執る人材の育成

と共に、運営資金の調達が今後の課題である。

§ 1 マンニャン族農村開発事業

2 - 1 ホリステック・ファーミング（総合農業）構想

バクバク村

識字教育事業で触れたように、事業地のマンニャン村では、以下のように、今年度は村存亡の危機にもつなげる事件を再三経験した。

問題	経緯
農地争議 (バクバク村)	9月、畑仕事に比較的習熟している村人と旧態依然の半遊牧的生活を送る村人の間で争議。理由は前者グループ、特に村長が後者グループの土地を無断で収奪、さらには追放を命じたことによる。川畷が中心になってPRA(Participatory Rural Appraisal「主体的参加型農村調査法」)を導入したミーティングを毎週約一ヶ月にわたって開催、村人自身による現状分析が行なわれ、最終的に和解。
不法伐採業者による脅迫 (バクバク村)	2月1日深夜、不法伐採業者のグループが「村を出て行け」と銃で村人を脅迫、村人全員雲散霧消。理由は、村人が不法伐採業者を政府管理当局に密告したこととなっているが事実関係は不明。以後外部者(伐採業者、政府役員を問わず全てのタガログ人)に対する村人や周辺マンニャン住民の対応の仕方について意見がわかれ分裂。事件自体は識字教育担当者が警察や郡当局と協力して解決のきざし。
カラバオ盗難 (カンルアン村)	10月、流れ者マンニャン男性が深夜同村でカラバオを盗難、タガログ人に売却したが、途上目撃者が多数あったことと、カラバオに協会焼印があったことで無事解決。

これらの事件はマンニャン社会全体の問題を以下の点で浮き彫りにしている。

マンニャン族生活圏の利権争い

一般にマンニャン族の居住区は、いまだに森林資源が豊富、かつ耕作可能で未利用

な土地が多い。このため人口が急速に増加しているタガログ人にとって非常に魅力的である。

マンニャン族に対する差別

土地や森林資源に対する魅力は、原始的半遊牧生活を送るマンニャン族への偏見、差別と結合してしばしば暴力的、不法な収奪へ導く。微小な借金が理由で土地が担保にされ、広大な土地が失われるケースはしばしばである。

極端な貧困

上記ケースもそうであったが、わずかな米を得るためにマンニャン族もしばしば不法伐採に加担している。マンニャン族は一般にタガログ人に対して異常な恐怖を感じているので半ば脅迫ともいえる。いずれにしても彼らの取り分は存外になく、餓えをしのぐためのやむなき手段である。

マンニャン社会の多極化

一言にマンニャン社会といっても、現在では依然山奥に住む人々と積極的にタガログ文化を受け入れタガログ人と付き合い人々の間には大きな差がでてきている。元来大きなコミュニティ運営の文化がなかった上に社会全体が多極化し、ますます混沌としている。

これまで協会では、ホリスティック・ファーミング（総合農業）構想を「1．ハードの供給、2．農業技術移植、3．村づくり」の3段階に分けて考えてきたが、一連の事件は次の二点が特に重要であることを再認識させた。

一つめは、村づくり事業はマンニャン族の未来にとって死活問題であること、そしてより広範囲にわたるコンセンサスを作り上げていくことが民族全体のセキュリティーにつながるということである。このことは同時に、自然環境保全とも密接に関係している。二つめは、新しい社会モデルの創設が必要であること、多極化し混沌とする社会に一つの方向性をもたせるガイドが必要であることである。

農業技術面では、すでに村人は基本的な稲作技術を習得しており、生産高は年々増加している。「水争い」や「土地争い」が頻繁になってきたのは、むしろ定住生活や農業に慣れてきたことを証明するものでもある。しかしながら同時に、民族固有の価値観はまだまだ根強く生きており、新しい価値観とますます葛藤が生じている。次の例はその典型的なものであろう。

PRA、問題ランキングで

村人に問題ランキングをしてもらった結果、「土地が奪われる」というのが

あった。理由には、「土地所有者がないから」、「所有者が怠け者だから」といったものの他に、「土地を奪ったものが勤勉すぎる」という回答があった。解決法も「あまり働きすぎないこと」であった。苦笑せざるを得ない結果だが、農業を受け入れたことによる村民の内的葛藤が垣間見られる。

今後の課題は、これら内的葛藤を昇華し、彼らの文化的負荷を考慮しながら新しい価値観、モデルを作っていくことである。現在、パーマカルチャーを意識しながらの村のデザインを協議中である。PRA(Participatory Rural Appraisal「主体的参加型農村調査法」)も導入しながら、時間をかけて村人全体のコンセンサス作りが目下の課題である。

カンルアン村

カンルアン村は外部者(タガログ人)の訪問もあまりなく、比較的村としてのまとまり感も強いが、本質的にはパクパク村と同じ問題を抱えている。年々タガログ人の農地が島の中心部まで伸びる一方、この村の住民のように農業をはじめようと山を降りるマンニャン族の数は増えており、二つの生活圏が重複する地域は確実に拡大しているからである。

同村では過去、定期的に農業指導を行ってきたが、カラバオ等の耕作動力の不足、鼠害や早魘などが原因で十分な成果を上げることができなかった。雨季の通行が極端に不便なことで、田植の時期など農繁期に十分な指導ができなかったことも一因である。今期もトウモロコシをはじめ各種野菜(ササゲ、ナス、カボチャ)を栽培したが、エルニーニョによる早魘でほとんどが枯れてしまった。

過去の反省を元に、またパクパク村での事件を教訓にして、12月以降長期プラン作成のための本格的調査を開始した。1月にはスタッフ滞在用施設を村人の協力で建設、川鳶が以後毎週調査のために村を訪問している。PRA(Participatory Rural Appraisal「主体的参加型農村調査法」)を導入しながら、村人のニーズと村のリソースを十分に引き出し、無理ないプラン作りが目標である。

2 - 2 衛生環境整備事業

この事業は、協会奨学生、協会のパイロット事業地住民を対象に、1.患者に対する医療補助と2.医療セミナーの開催による住民の衛生知識の向上、という2本柱で行なわれた。また、日本人インターンシップの一環として、セミナーの企画・運営、投薬の管理はインターン生国金さつきが女子ボランティア・スタッフ(Prescilla Rinangyan, Arlene Bernardo, Josie Kasison)と協力してこれを行なった。

セミナーは、パクパク村とカラミンタオ村でほぼ毎月一回、基礎的な衛生知識や薬の正しい処方仕方、応急処置などについて、また、伝統的な薬草の再認識など多岐にわたり、住民の好評を得た。また、事業地や寮で発生した疾病についても、適切なケア、病院への付き添い、予算内での無料の投薬など、できる限りのサービスを提供できた。医薬品の無償援助を別にしても、病院への付き添いや適切な判断は、時に人命にかかわる場合があり、住民の信頼を勝ち得る大きなサービスの一つである。

井戸掘りも衛生環境を整える上で非常に重要な事業である。機能する井戸が一基もないカンルアン村では、長らく生活水の確保は大きな問題の一つであった。4月、硬い地盤を1週間も掘るといふ重労働の末、安全な水が確保できる井戸が設置され、村人に大変喜ばれた。

§2 エコ農業学校コンプレックス構想

3 - 1 農場経営

昨年度に無償で借り入れた約1.7ヘクタールの荒地を開拓し、各種野菜の栽培のみならず、養鶏養豚、魚の養殖などを織り交ぜたポリカルチャーの実現が今期の目標であった。

荒地は昨年6月までにはほぼ開拓整地が済み、農場の脇を流れる川の水を利用した養殖池の工事も3月現在ほぼ終了している。

活動カレンダー

月	活動内容
4月	荒地開墾、養殖池の掘削開始。
5月	各種野菜（ササゲ、ナス、オクラなど）の種蒔。米収穫
6月	地鶏養豚事業の開始。
8月	田植
9月	豚小屋、鳥小屋建設
12月	米収穫
2003年1月	田植
3月	養殖池完成。稚魚の放魚予定

農場は海と塩分を含む川にはさまれており、当初野菜やトウモロコシの栽培が

可能であるのか懸念されたが、初回の出来はまずまずであった。しかし、近隣に住むヤギや豚が畑に侵入したり、地鶏が何羽も盗難にあったりするなど、思いがけない被害が多く初年度の出来高は決して満足の行くものではなかった。また、水田も現在の 0.8 ヘクタールから 2 ヘクタールに拡張する予定であったが、値段が折り合わず見送ることになった。今後は農場で実際に働いている訓練生（ボランティア・スタッフ）にセミナーをはじめとするエンパワーメントを行ないながら、土地利用デザインからパーマカルチャーの思想にのっとって進めていく方針である。

3 - 2 各種職業訓練

農場経営に加えて、今期は漁業訓練、溶接訓練の職業訓練を開始した。先の農場での訓練と合わせて、現在下記リスト中男子 5 名の訓練生がローテーションを組み合わせながら漁業、溶接の訓練を行なっている。漁船の訓練操業は 9 月以降、季節風による波浪の強い時期を別にして順調であり、寮生活をする奨学生の食卓に定期的に供給できるようになった。溶接技術も一部の訓練生はすでに基礎技術を身に付けており、後述するマンニャン人間開発センターの建設にあたって活躍することが期待されている。

また、女子職業訓練（洋裁、料理）については、資金繰りがつかず、今期は事業をはじめることができなかった。しかし、昨年度ハイスクールを卒業した 3 名が、衛生環境整備事業に参加しながら衛生医療について学習したり、奨学生への指導を通して多くのことを学ぶことができた。

ボランティア・スタッフ（訓練生）リスト

男子	Alvin Miranda
	Pedro Rinangyan
	Carlos Bernardo
	Verner Rinangyan
	Peter Rinangyan
女子	Prescilla Rinangyan
	Arlene Bernardo
	Josie Kasison

3 - 3 日本人インターンシップ

それぞれ現地赴任 3 年目、2 年目をむかえる紫垣伸也、国金さつきが、現地準スタッフとしてさまざまな業務をこなしながら、NGO 運営の基礎、コミュニティー・オーガナイズングについて学習した。

プログラム	インターン	成果
奨学生学習指導	紫垣伸也 国金さつき	週末を除く毎晩、算数を中心に公文方式を採用した約 1 時間の学習指導。寮生の全てが、分数や百分率などの基礎計算能力を習得。
衛生環境整備事業	国金さつき	女子ボランティアに指導しながら、医療セミナーを毎月パイロット村で開催。寮や村の病人への細かな対応。
奨学生個別指導	紫垣伸也	無断欠席したり、学力の低い生徒に対し、学校や村の両親と緊密な連絡をとりながら個別に指導。落伍寸前の児童数名が無事進級。
大豆実験栽培	紫垣伸也	一昨年度からはじめた実験栽培のマスプロ化。昨年度までの実験結果をもとに高収量の品種を実験農場、パイロット事業地で栽培。
PRA 調査補佐	紫垣伸也	PRA 活動の補佐。川鳶といっしょにパクパク村で PRA を開催。PRA 手法を学んだ。
会計補佐	国金さつき 紫垣伸也	奨学金事業の会計管理、一部帳簿のチェック、入力作業などをおして事業経営に部分的参加。

§3 マンニャン人間開発センター構想

構想のみで資金のめどがたたず、来期へ事業は見送られることになったが、先にリース契約を終えている協会敷地では既に男子寮が昨年 6 月に完成しており、その他空き地は大豆や薬草の実験栽培として利用された。

事務所をはじめとする家屋の基礎設計もすでに 8 月には完成しており、資金の調達ばかりが課題となっている状態である。

(了)